

日本語—手話同時通訳における作業内容の分析 ～日本語から手話への変換作業を中心に～

白澤 麻弓

(筑波大学大学院心身障害学研究所・日本学術振興会特別研究員)

This paper examined how sign-language interpreters translate Japanese to sign language in terms of interpreting strategies they use in their performance. The results showed, among other things, that “Intended Omission” occurred about thirty to sixty times in each interpreter’s performance and that the amount of intended omission tends to increase when interpreters work under constraints. It was also found that less experienced interpreters tend to replace difficult lexical items with easier ones. The rewording to a subordinate concept usually led to lucid translation, but the rewording to a superordinate concept easily resulted in ambiguous translation. The “Addition” strategy was mostly used to make clear and visible what are not uttered but implied in the source language. Experienced interpreters usually borrowed terms from Japanese to make clear which word was used in the original sentence, but less experienced interpreters borrowed Japanese when they didn’t know how they could express a certain word or concept in sign language. The study also showed that sign-language interpreters can be classified into three types in terms of their dominant interpreting strategy; i.e. the Omission type, the Rewording type, and the Compression type.

1. はじめに

1960年代初頭、Stokoe が世界ではじめて聴覚障害者の日常的に用いている手話を言語学的に分析して以来 (Stokoe,1960)、手話が音声言語とは異なる独自の文法体系を有した言語であるという認識が世界的に広まりつつある。わが国においても1970年代後半より、言語としての手話に関する研究が始まり、この成果から、日本手話が非常に複雑でかつ高度に洗練された文法構造を有していることが明らかにされている (米川, 1984 ; 神田, 1994 ; 神田・

SHIRASAWA Mayumi, “An Analysis of Interpreting from Japanese to Sign Language.”

Interpretation Studies, No. 2, December 2002, pages 63-86.

(c) 2002 by the Japan Association for Interpretation Studies

藤野, 1996; 市田, 1994, 1997, 1998 など)。

一方、手話には、音声言語とは別の独自の言語構造を持つ「手話言語」のほかに、手話単語を音声言語の語順に添って配列する「対応手話」、および両者の混合であり、それぞれの要素を取り入れた「中間的手話」などいくつかのバリエーションが存在し(Baker & Cokely, 1980)、わが国においても、それぞれ「日本手話」、「日本語対応手話」、「中間的手話」などと区別されている(神田, 1994)。

日常的に手話を用いている聴覚障害者の中でも、教育歴や失聴年齢などによって用いる手話が異なっており、手話通訳者はそれぞれの聴覚障害者に応じてもっとも適切な手話を使い分けることが要求されている。しかしながら、通訳者にとっては第二言語としての手話言語を完全に習得することは非常に困難であり、現実的には通訳者のできる範囲で対応せざるを得ないという側面も存在する¹⁾。

一方、わが国における手話通訳者の養成・評価・認定制度は、いまだ十分な状況にあるとは言えず(全日本聾唖連盟 1985, 1988, 1986, 1998; 日本手話通訳士協会 1994)、これに関する詳細な研究も少ない。特に、手話通訳者が実際に通訳現場で行っている作業に焦点を当てて分析した研究はほとんどなく、手話通訳の作業内容については不明な点が多い。同時に、通訳の受け手となる聴覚障害者が手話通訳者に対して抱いている期待の内容も十分整理されておらず、これらのことが、実際の養成現場で現状に即した系統的な指導を行うことを困難にする要因となっている。

そのため、今後手話通訳環境の質的・量的拡大のためには、手話通訳者が現実に行っている作業の内容および聴覚障害者の期待の内容を明らかにし、手話通訳者に対する聴覚障害者の期待の充足度という側面から手話通訳を再評価していくことが不可欠である。

本研究では、これらの目的を達成するための第一段階として、手話通訳者によって実際に行われている通訳の作業を詳細に記述し、量的・質的にその内容を把握することを目的とする。このために、白澤(1999, 2000a, 2000b)、白澤・斎藤(2000)は、経験年数の異なる6名の手話通訳者の日本語—手話同時通訳を「訳出率」「タイムラグ」「変換作業」「訳出表現」の4つの側面から多角的に分析し、手話通訳中に通訳者の行っている作業内容を詳細に明らかにしている。本稿では、これらの結果を元に、より詳細に個々の変換技法の使用のされ方、および変換の方略について分析し、手話通訳の作業内容を具体的に明らかにする。

2. 分析法および分析資料の作成

2.1 被験者

関東地方に在住し、本実験の実施時点において通訳活動に従事している手話通訳者6名を被験者とした。経験年数の違いによる通訳作業の差異についても検討するため、手話学習歴は3年未満から25年程度と幅広い通訳者を対象とし、経験の長いものから順にA, B, C, D,

E, Fとした。このうち A から D の 4 名は厚生大臣認定手話通訳士の資格をもっており、A および C は特に手話通訳者としての活動経験も豊富であった。E と F は手話学習歴がともに 3 年未満で、手話通訳の経験も少なかった。

2.2 通訳時の使用手話

通訳者の自然な通訳の状況を観察したいと考え、通訳時の使用手話については特に限定せず、「手話と日本語の両方を理解できる不特定多数の受け手に対して通訳する場面(講演会など)を想定して通訳を行ってください」とだけ教示を行った。その結果、いずれの通訳者もデータ収録時には日本語対応手話をベースとした中間的手話を用いて通訳を行っていた。中間的手話は基本的には日本語の語順に沿って手話単語を表出するが、必要に応じて空間を活用したり、うなずきなどの日本手話の文法を借用するものであり (Baker & Cokely, 1980)、一般的に手話通訳者によって広く用いられているとされている。

2.3 起点談話

通訳対象となる談話(以下、起点談話とする)は、NHK「視点論点」より選択した。起点談話は通訳時の負荷を減らすため、話の筋が理解しやすく、聞き取りやすい速さのものとした。また、原稿を読む形式のものは、情報密度が高くなりがちで、通訳が困難であることから、話者が原稿なしに即興的に話しているもので、ある程度冗語が含まれているものを選択した。

選択された起点談話は全体で 8 分 50 秒からなり、1 人の話者が一方的に話す形式で、発話速度は 324.2 字/分であった。テーマは「ユーモアと金物屋さん」であり、身近なエピソードを交えながら話者が自分の考えを話すもので、難解な語句などは含まれておらず、事前原稿などの準備がなくても十分に通訳可能であると考えられた。

2.4 手続き

あらかじめビデオテープに録画された起点談話を通訳者の後ろに設置されたテレビによって放映した。通訳者が配置についた後、実際に訳出を行う前に、ビデオから流れる音声に慣れてもらうため、冒頭数十秒間を通訳者に聞かせ、聞きづらい場合は配置や音量を調節した。その後、通訳者に日本語から手話への通訳を行ってもらい、その全体をビデオカメラ(SONY HANDYCAM TRV5) で収録した。データ収録場面のセッティングを図 1(p. 76) に示す。

通訳者に対しては、事前情報として当該談話のタイトルと、その内容が話者の経験を伝達する日常的なものであることを伝えた。なお、通訳という行為は本来被通訳者との間で成立する双方向的なものであり、実際の通訳現場では被通訳者の反応を見ながら訳出方法を変更するとされている。しかしながら、本研究では、そうした被通訳者の要因によって通訳行為に変化が生じることを防ぐため、あえて被通訳者は置かずに実施することとした。

2.5 分析資料の作成

1) 作成方法

収録したデータのうち約 5 分間を分析対象として取り出した。抽出にあたっては、はじめの数十秒間は通訳者がまだ十分に話の筋をつかんでいないと考えられることから除外し、残りの部分のうち、聞き取りづらかったり論旨がわかりにくい部分を除いて、話者が日常的なエピソードを話している部分を選択した。この結果、取り出された箇所は話者が自分の経験を語るふたつのエピソードで、題材のビデオテープ開始の 30 秒めから 2 分 40 秒までの 2 分 10 秒間と、3 分 58 秒から 6 分 41 秒までの 2 分 43 秒間の 2 箇所、合計 4 分 53 秒 (25 文/396 文節) であった。

その後、起点談話と各通訳者の訳出表現をそれぞれ書記化し、水野(1995)を参考に同一の時間軸上に相互の時間関係がわかるような形で表記した。ただし、各文の文頭・文末の時間を基準にプロットしたため、文中の単語については表記の制約上多少ずれが生じている部分もある。起点談話の記述にあたっては、音声で話されている事柄のうち意味のない指示代名詞(「あの」「その」など)、母音の引き延ばし(「え…」など)、および「こう」「まあ」などの冗語は除いて書記化した。

2) 手話の表記

手話の表記法として代表的なものにストーキー法 (Stokoe, Casterline, Croneberg, 1976)、サットン法 (Sutton, 1978) などがあり、わが国でも日本手話の表記法確立のために研究が進められている (Kato, 1987; 本名・神田・小田・加藤, 1984)。これらは音声言語の国際音声字母にあたるもので、手話の「音声表記」の試みであるといえる。しかしながら、これらの表記法はまだ十分に確立しているとは言えず、また本研究では構成素単位の詳細な記述は不要であると考えたため、手話の文法研究で一般的に使用されている方法に則り (Baker & Cokery, 1980; 神田, 1994; 市田, 1998 など)、手話単語の日本語訳のうち代表的なもの 1 つを手話単語のラベルとして用いて記述した。また、手話単語以外の表情や頭の動きといった非手指動作については、必要に応じて補助記号を用いて表記した (表 1, p. 76)。ただし、手話の表記の問題で十分に記述しきれなかった部分に関しては、適宜収録したデータを見ながら分析を補完する形を取った。

なお、手話における単語の意味範囲は日本語のそれとは必ずしも一致しないため、手話単語につけられるラベルはあくまでもその単語を表記するために便宜的に用いるものであり、単語の意味を示すものではない。

3) 分析項目

日本語から手話への語彙レベルの変換作業として分類された「省略」「言い換え」「付加」「原語借用」「圧縮・統合」「同等」(表 2, p. 77)のうち、特に通訳者ごとに特徴的な差異が見られた省略、言い換え、付加、原語借用について、下位カテゴリーに分類し、それぞれの出現頻度および通訳者ごとの特徴について分析を行った。なお、ロールシフトなどの文・句レベル

の分析も行ったが、紙面の都合上本稿では省略する。

4) 分析の信頼性

分析の信頼性を検討するために、各下位項目への分類の際には、手話通訳士の資格を持ち、手話の読みとり技術をもつ2名の通訳者によって独立に評定を行い、その一致度を算出した。一致度の算出方法と結果については以下の各章で述べる。本来、手話の評価に関しては手話ネイティブのろう者によるチェックが必要であると考えられるが、本研究では通訳者の多くが中間的手話を用いていたこと、および起点言語（音声日本語）および目標言語（手話）の両方が評価の対象となるため、今回は通訳者のみによる評定とした。

3. 結果と考察

3.1 省略

基点談話に含まれる文節のうち、手話による訳出が行われていない箇所量は、通訳者によって約40回から200回と差がみられた²⁾。ここではその省略の内容について分析したところ、くり返しや、あまり重要でない語句で通訳者の判断によって省略されたと考えられる「意図的省略」と、時間的遅れによる「脱落」、手話表現が思いつかない、原文が聞き取れない等の理由で表せなかったとみられる「訳出不可」の3種類に分類することができた。これらの下位カテゴリーの詳細を表3 (p. 77) に示す。

このうち「脱落」と「意図的省略」は、第三者が厳密に分類することは困難ではあるが、本研究では直前の文あるいは句の訳出が遅れ、間に1単位以上の句や文が入ってしまったとき、その部分をまったく表示せずに、次に現れた文や句の訳出を始めたものを「脱落」とし、同じく遅れによるものであっても、単位内の一部が表示されているものは、それ以外の部分を通訳者の判断によって意図的に表さなかったものと考え、「意図的省略」に分類することとした。分類にあたっては、手話通訳士の資格を持つ2名の評価者によって独立に評定を行い、全体の20%について観察者間の一致率を求めたところ82.3%であった。

図2 (p. 80) には、省略の種類ごとの出現回数を各事例ごとに表示した。ここでは、「意図的省略」を通訳上必要な変換技法ととらえてグラフの上部に表示し、時間的遅れによる「脱落」および「訳出不可」を通訳上のミスと考えてグラフ下部に表示した。この結果、各事例間の「意図的省略」の出現回数の幅が、31から60回(全文節の8.8から17.0%)で一定の幅に収束しているのに対して、遅れによる「脱落」や「訳出不可」は通訳者によって出現回数に顕著な差が見られた。

また、「意図的省略」として省略された語句には、通訳事例ごとに共通した傾向があった。特に省略の出現頻度の少ない3名の事例の場合、その多くが表4 (p. 77) に示したような繰り返し部分を簡略化して表示するものであった。本研究で用いた基点談

話には、同じ意味を言葉を言い換えて説明する部分で、特に早口になる傾向が認められた。そのため、通訳者は訳出の時間的制限からこのような重複表現を意図的に省き、簡略化して訳出を行ったものと考えられる。

次に、「意図的省略」の出現回数が比較的多い 2 名の事例の場合、先に述べた繰り返し部分の省略に加えて、表 5 (p. 77) に示すような副詞や修飾表現を省いて訳出する傾向にあった。これらは、ニュアンスを伝えるためには訳出したいが、省略しても起点談話の大筋を伝えるためには影響の少ない語であると考えられ、訳出の遅れや通訳者の持っている手話言語力の限界など、何らかの制約が加わったために省略せざるを得なかったのではないかと推察される。

また、これらの通訳事例が訳出上のどの位置で「意図的省略」を用いているかを、トランスクリプションおよび実際の収録データで確認してみたところ、図 3 (p. 81) に示すように、訳出が追いつかなくなる部分で多く省略を用い(二重下線部)、原文を簡略化して伝える場面が 2 名の通訳者に共通して何箇所か認められた。これは、訳出の遅れによる情報の脱落を防ぐために、省略を技法的に用いている例であると考えられる。

以上に述べた「意図的省略」に対して、訳出の遅れ等の著しい制約が生じてしまったことにより、通訳者自身の意図に反して「脱落」や「訳出不可」が生じてしまう場合も存在する。この例を図 4 (p. 81) に示す。この例は通訳経験がもっとも短く、現在訓練中の通訳者のものであるが、ここでは 1 箇所の訳出に時間がかかってしまったため、それに続く 1 節が脱落したり(図中)、訳出しようとしたが、訳語が思いつかなかったためか結局訳出せずに次の句の訳出に取りかかかかる様子(図中)などが見て取れる。

手話通訳にはいくつかの技法があると考えられ、省略の量がそのまま通訳の質とつながるものではないと筆者は考えるが、本分析で得られた結果と各手話通訳者の通訳に対する全体的印象を結び付けて考察したところ、本研究で用いた題材においては、通訳の際、ある一定数の省略が生じており、これらは通訳上必要なものであると考えられた。また、こうした意図的省略の量は各事例ごとに差はあるものの一定の範囲に収束していた。しかし、訳出の遅れや手話言語力など、この状態に何らかの制約が加わることによって意図的省略の量が増加し、さらに制約が大きくなると遅れによる脱落・訳出不可が出現、増加していくのではないかという兆候がみられた。しかしながら、通訳の習熟度という側面から考えて、これらの結果が果たして一直線上に並ぶものなのか、それとも異質のものなのかについては明らかではない。また、同時処理能力や手話言語力、通訳経験の長さなど、通訳の質に関係する要素はたくさんあると考えられるが、それらのうちどの制約がこれらの結果に結びついたのかについても不明である。今後、日本手話をすでに身につけた CODA の通訳者との比較など、条件を限定してより深く検討していく必要があるだろう。

3.2 言い換え

1) 言い換えの種類

基点談話を目標言語である手話に訳出する過程において、基点談話中に用いられている表現が別の語に置き換えられる「言い換え」が生じている箇所について、その内容を分析したところ、表 6 (p. 78) に示す通り、指示語や曖昧な語句の内容を説明的に明示するタイプと、手話と単純には対応していない語について別の語に言い換えるタイプの 2 つが見られた。さらに後者は、訳出の際に説明的に表示する「説明」、同等の語で代用する「類似代用」、言い回し自体を変える「変容適合」の 3 種類に分類された。分類にあたっては、2 名の評価者によって独立に評定を行い、無作為に抽出した全体の 20% について観察者間の一致率を求めたところ 87.2% であった。ただし、同一事例内で同じ語をくり返し同じ言葉に言い換えている場合は、すべてを合わせて 1 回とし、句レベルでの言い換えが生じている箇所は、他の言い換えと性質が異なるものと考えて分析対象から除いた。

これらのカテゴリーに基づいて各事例が用いている言い換えの種類を整理したところ、図 5 (p. 81) のような結果となった。ここでは、経験の比較的短い事例に「変容適合」が多く見られ、もっとも経験年数の短い事例 F にはこれ以外の言い換えがほとんど出現していなかった。「変容適合」は、先に述べた通り、単純には手話に対応していない語に対して、起点談話の言い回しそのものを変えて表現する方法で、例えば「...に始まって」「ことばをはける」「冗談をとばせる」「年ごろのお嬢さんたち」などの言い回しを、それぞれ「...と同じように」「ことばを言える」「冗談を言える」「若い女性」と言い換えるような例が見られた。本研究の範囲では、こうした変容適合は特に手話に翻訳しにくい日本語独特の表現に多く適用されていた。一方、経験の長い事例ではこのような文章をさまざまな手話の文法を活用することで、できるだけ日本語のニュアンスを残したまま翻訳していた。このことから、経験の短い事例では、基点談話中の日本語表現を自分自身の持っている手話語彙の範囲でより表現しやすい方向にシフトさせて表現する傾向にあるのではないかと考えられた。

ただし、ここでみられた事例ごとの違いは、経験年数以外に手話の表現能力や語彙力、通訳の際の使用手話の違いなどによってもたらされているとも考えられるため、この点についてはさらに追求が必要であろう。

2) 言い換えの的確さ

基点談話から手話に訳出する際に生じる言い換えについては、先に述べた技法としての違い以外に、言い換えの前後での語の変化についても検討可能であった。そこで、言い換え全体をより一般的な語への置き換え（「上位概念への言い換え」）と、より具体的な語への置き換え（「下位概念への言い換え」）、および、どちらにもあてはまらないもの（「同等な言い換え」）の 3 種類に分類した。同時にそれぞれについて、言い換

えた結果、より明確に内容を示すようになるものと、原文のニュアンスやふくらみが失われてしまうもの、あるいはどちらとも言えないものの3種類に分類することができた。これらの判断は、いずれも主観的で曖昧なものではあるが、同じ「言い換え」の中でも、通訳事例によって言い換え方や語句の選択が異なる傾向がみられたため、これを数量的に検討するため、試験的に以下の分析を行った。

まず言い換え全体を、表7 (p. 78) に示した基準に従い、上位概念への言い換え（上位）と下位概念への言い換え（下位）、および同等な言い換え（同等）の3種類に分類した。この結果、158種類の言い換えるのうち、「上位」が51種類、「下位」が92種類、「同等」が15種に分類された。次に、「上位」と「下位」への言い換えに分類されたものについて、さらに表8 (p. 78) の基準に従い、言い換えられた結果が適切とみられるものと不適切とみられるものに分類した。分類にあたっては、2名の評価者によって独立に評定を行い、無作為に抽出した全体の20%について観察者間の一致率を求めたところ、「上位」「下位」「同等」の3種類への分類については92.3%、言い換えるの適切・不適切の判断については79.5%であった。なお、言い換えるの結果が適切とも不適切ともいえないものについては、すべて適切に含めることとした。

図6に、これらの結果を示した。グラフ上側には言い換えた結果が適切であるもの、下側には不適切であることを提示し、それぞれ色の濃い部分が上位概念への言い換える、薄い部分が下位概念への言い換えるの量を示している。表9 (p. 79) には、それぞれ言い換えるの結果が適切（表9-1）あるいは不適切（表9-2）であると判断されたものの例を示した。ここから、言い換えるが適切と分類されたものの中には下位概念への言い換えるが多く、逆に不適切とされたものの中には上位概念への言い換えるが多く含まれることが明らかにされた。また、同程度の量の言い換えるを用いている事例であっても（CとEなど）、一方は言い換えるの結果原文がより明確に伝えられるのに対して、他方は伝えるべき内容があいまいになり要約的な訳出になってしまう可能性が示唆された。

このような言い換えるによって生じる訳出の違いは、単に情報が省略されている場合などと異なり、通訳の受け手である聴覚障害者にとって、もっとも見えにくく、また指導しにくい部分ではないかと考えられる。そのため、今後、聴覚障害者のニーズをより満たす通訳者を育てていくためにも、通訳者の行っている作業をもっと目に見える形で記述・提示し、聴覚障害者とともに議論していかなければならないだろう。

3.3 付加

起点談話に含まれていない語で、目標言語として付け加えられている「付加」をその機能によって分類したところ、起点談話で省略されている語を訳出中に顕在化させる「省略された語の顕在化」、接続詞などを付加し、文章構造を明確にするために整理・修正する「文の整理・修正」、語を訳出する前や後に、それが何を示すのかを表示するために上位概念を提示する「上位概念の提示」、およびある語に対してその内容を言い

換えて説明を付加する「説明の付加」の4つの下位カテゴリーが得られた。表 10 (p. 79) には付加の下位カテゴリーの詳細を示した。分類にあたっては、2名の評価者によって独立に評定を行い、無作為に抽出した全体の20%について観察者間の一致率を求めたところ、90.5%であった。

図 7 (p. 82) には、これらの出現回数を通訳事例ごとに整理した結果を示した。ここから、付加の中には起点談話で省略されている語を訳出中に顕在化させるものが最も多く、どの事例にも出現していたが、これ以外の3種類については用いていない事例もあった。このうち、顕在化や整理・修正は、文章の流れの中で起点言語である日本語と目標言語である手話の構造上の違いにより生じるものであり、説明の付加、上位概念の提示は、通訳者がより情報を正確に伝えようとして原文以上の内容を自ら付加するものである。しかし、後者は主に原語借用にともなって出現していることから、ある程度出現位置に制約があり、このことが全体的な量の少なさに関係しているものと考えられた。

また、付加の使用頻度が高い事例 C、D は、用いている種類も多く、B、A はこれより若干少なかった。また、E は付加の使用頻度が C、D に次いで多いが、用いている種類は少なく、説明の付加、上位概念の提示といった原語借用にともなう付加は現れていなかった。さらに、F には顕在化の1種類しか見られなかった。

このうち、説明の付加や上位概念の提示は手話通訳者の養成の中でもよく指導される通訳独特のスタイルであり、手話通訳の経験年数の短い E、F はこれらの手法を十分に身につけていないのではないかと考えられた。

3.4 原語借用

訳出表現中で原文の日本語が借用されている部分について、さらにその機能の違いについて検討したところ、表 11 (p. 80) に示すとおり「原語表示」「手話なし」「代用」の3種類に分類することができた。分類にあたっては、2名の評価者によって独立に評定を行い、無作為に抽出した全体の20%について観察者間の一致率を求めたところ、87.5%であった。

最も多く出現しているのが対応する手話がない場合に用いられる借用であった。これは外来語や固有名詞、複合語などで、一般的に広く用いられているような対応表現がない場合に原語がそのまま借用されるものであり、このうち元の原語が長い場合は、語頭の数字のみを指文字で表示する省略形や、これに原語の口形を付加して伝えるものなども見られた。

次に多かったのが原語表示で、他の手話と併用され、それのみでは伝わりにくい部分について日本語を表示する目的で用いられていた。原語表示の中には一度手話で表した語に対する補充として用いられたり、あるいは逆に原語で表示したものに対して手話で説明が加えられたりしており、いずれも原語を借用する際に口形や視線による

強調がともなうことが特徴的であった。また原語で表示した後、手話で説明が加えられているものの中には、その後くり返し同じ用語が出現した時に、初回に用いた指文字が2度目以降強調表示がなくなり、語彙化してそのまま用いられる場合と、初回は指文字で表示し、あわせて手話表現を表示しておくことで、2回目以降その手話表現を用いる場合のふたとおりが見られ、後者は特に手話の表出時間の短縮に寄与しているものと考えられた。このように、原語と訳語をあわせて表示するという方法は、訳出された手話表現と起点言語テキストに含まれる日本語とをうまくつなぐための仲介の役目をしているものと考えられ、話し手と受け手である聴覚障害者の間で日本語を共有していることの効果であると考えられた。

最後に、通訳者自身が手話が思いつかなかったり知らなかったりする際に用いられる代用があり、これには言いよどみやためらいの表情をともなっていた。

これを各通訳事例ごとに見てみると、**図 8 (p. 83)** に示した通り、対応する手話表現のない語に対して用いられる原語借用が多い傾向は変わらなかったが、Bを除けばD, E, Fと経験の少ないものほど代用が多くなり、同時に原語表示が少なくなるという関係が見られた。他の分析と同様、これには経験年数以外に使用手話の違いや手話言語力などの要因も働いていると考えられるが、いずれにしても、6事例のうちAやCは手話と日本語の間で、日本語の語を伝えるための手段として指文字を用いているのに対して、E, Fなどは手話が思いつかなかった時の代替手段として指文字を用いている傾向が強いことがわかり、通訳者によって指文字の機能が異なる場合があることが示唆された。

3.5 変換と時間の関係

以上、「省略」「言い換え」「付加」「原語借用」の各変換作業について、その使用のされ方を個々に検討してきた。ここでは、以上で述べてきた変換作業のうち、各事例ごとに特徴的な部分をトランスクリプションに記入し、これらが生じる位置とこれに関わる要因を継時的に分析し、取り上げることとする。

まず**巻末資料 1 (p. 84)**には、省略が多く見られた通訳事例における訳出例を示した。ここでは1語1語の訳出に時間がかかってしまうため遅れが生じ、この遅れを回復するために、途中単語レベルで「省略」しながら訳出を進める様子がみられた。しかし、間に1つから2つ以上の句が入ってしまうと、基点談話に追随することができずに「脱落」が生じていた。その後、次の文が始まるが、すぐに訳出が開始できずに「訳出不可」となる部分が生じていた。これは、途中脱落した部分の内容がつかめていないために、話の流れを聞いているためだと考えられる。また、手話の代用として原語を指文字で表示している部分が何箇所か見られ、このことも時間的な遅れを誘発する原因となっていた。このように、**巻末資料 1**の事例では省略しながら訳出を行う部分と、脱落あるいは脱落不可となる部分が分析対象となった文章全体にわたって見

られ、これが反復するというパターンをなしていた。

次に、省略は少ないが上位概念への言い換えが多い通訳者の事例を巻末資料 2(p. 85)に示す。この事例の場合、遅れが生じた箇所で、その間の情報を簡潔に伝えようとするときに「言い換え」が生じるという特徴があった。これにより、情報の脱落を回避することが可能になっている反面、「上位概念への言い換え」が頻発し、訳出が要約的になってしまっていた。

これに対して、全体的な訳出率の高い通訳事例の場合(巻末資料 3, p. 86)、訳出中に大幅に遅れたりする箇所は見られず、必要に応じて言い換えたり説明を付加したりしながら基点談話の内容を伝えていた。特に、高い訳出率を保ちながら、訳出語数の時間的制約をクリアする方略として、ロールシフトや語形変化による意味の付加など、手話の文法を活用して、少ない語数で原文の内容を圧縮的に表示する「圧縮・統合」が有効に活用されていた。訳出表現に日本手話を用いた場合、こうした表現はさらに増加すると考えられ、手話言語学や対照言語学から得られる知見をあわせて今後さらに検討すべき課題であると考えられる。

4. まとめ

本研究では、経験年数の異なる手話通訳者 6 名の通訳作業の内容を、おもに日本語から手話への変換作業の側面からその方略について質的に分析した。この結果、以下のような知見が明らかにされた。

- どの事例にもある一定数の意図的省略が見られるが、これに何らかの制限が加わると意図的省略の量が増加し、さらに訳出の遅れによる脱落や訳出付加が出現するようになる。
- 経験の浅い通訳事例の場合、日本語独特の言い回しをより通訳しやすいことばに変換して訳すことが多い。
- 下位概念への言い換えは、言い換えによって原文の内容をより明確に表すことが多いが、上位概念への言い換えは、言い換えた結果、基点談話の持つニュアンスやふくらみが失われたりあいまいになることが多い。
- 付加には省略された語を顕在化するもの、文の整理修正をするもの、上位概念の提示(指文字をあらわす前に「名前」「テーマ」などをつけるもの)、説明の付加(ことばを表したあと説明を加える)などがあり、顕在化が最も多く用いられているが、上位概念の提示や説明の付加は経験の浅い通訳事例には表れていない。
- 日本語を伝える手段として指文字や漢字の借用を行っている者と、手話が思いつかなかったときの代用として指文字を用いる者など、事例によって指文字の機能が異なる。

本研究では事例ごとの違いとして経験年数のみを取り上げたが、手話言語力や使用

手話、通訳に必要な処理能力の差異など、このほかに働いているであろう要因については検討することができなかった。また、通訳を行う題材や通訳の受け手となる聴覚障害者の違いによっても通訳者が行う作業内容は変わってくると考えられ、今後さらなる比較検討が必要とされる。

同時に、本研究によって通訳者が用いていることが明らかになった各方略が、通訳の受け手となる聴覚障害者の評価にどのような影響を与えるのかについても研究していく必要があるだろう。このことは、聴覚障害者のニーズをより満たす手話通訳を提供していく上で非常に重要な課題であり、今後取り組むべき重要なテーマであると考えられる。

[謝辞]

本研究を進めるにあたって、データの収集にご協力いただきました手話通訳者の皆様に深く感謝いたします。尚、本研究は平成 12 年～14 年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)手話通訳作業に関する心理言語学的研究(課題番号 05336)による研究成果の一部です。

筆者紹介：白澤麻弓（しらさわまゆみ） 筑波大学を卒業後、同大学大学院博士課程心身障害学研究科に進学。2000 年「日本語-手話同時通訳の内容分析」にて修士号（心身障害学）を取得。現在、後期課程に在籍し、聴覚障害者の情報保障、特に手話通訳に関する研究を続けている。手話通訳士。著書『聴覚障害学生をサポートする大学ノートテイク入門』人間社 2001)『聴覚障害学生サポートガイドブック』（日本医療企画 2002）など。

E-mail:<smayumi@human.tsukuba.ac.jp>

[註]

- 1) 一部通訳者の中には両親が聴覚障害者で手話を母語として習得した者（CODA: Children of Deaf Adults）も存在するが、この数は通訳者全体に比較するとごく一部である。最近では言語としての日本手話を習得するための手話教授法の見直しが図られており、今後さらなる発展が期待される。
- 2) 省略の判定に当たっては、原文と訳出の間に厳密な一致は求めず、各文節の内容が何らかの形で訳出表現の中に表示されている場合は訳出されているとみなした。本稿では詳しく述べないが、訳出のうち要約的に表したり、目標言語の特性上簡略に表示できる部分も「圧縮・統合」として分類されているため、省略には含まれていない。

[参考文献]

Baker, C. & Cokely, D. (1980). *American Sign Language : A teacher's resource text on*

- grammar and culture*. Linstok Press, Silver Spring.
- Stoke, W. C. (1960). *Sign language structure : An outline of the visual communications systems of the American deaf*. *Studies in Linguistics Occasional Papers 8*. Department of Anthropology and linguistics, University of Buffalo, New York. (Reprinted Silver Spring, Linstok Press,1978).
- Stokoe, W. C., Casterline, D. C., & Croneberg, C. G. (1976). *A dictionary of American Sign Language on linguistic principles*. Linstok Press, Silver Spring, Md.
- Sutton, V. (1978). *Sign writing for everyday use*. The Center for Sutton Movement Writing.
- 本名信行・神田和幸・小田候朗・加藤美保子 (1984) 手話の表記法について. 手話学術研究会 論文集, 7, 1-11.
- 市田泰弘 (1994) 日本手話の文法と語彙. 日本語学, 13, 25-35.
- 市田泰弘 (1997) ろう者と視覚—手話における視線の分析を通して—. 日本記号学会(編), 感覚変容の記号論, 記号学研究, 17, 71-86.
- 市田泰弘 (1998) 日本手話の文法. 言語, 27(4), 44-63.
- 神田和幸 (1994) 手話学講義—手話研究のための基礎知識—. 福村出版.
- 神田和幸・藤野信行(編) (1996) 基礎からの手話学. 福村出版.
- 白澤麻弓(1999)手話通訳作業に関する心理言語学的分析—その 1 手話通訳作業の記述とその分析—,日本手話学会第 25 回大会予稿集,54-57.
- 白澤麻弓(2000a)日本語-手話同時通訳における内容分析,平成 12 年度筑波大学博士課程心身障害学研究科中間評価論文.
- 白澤麻弓(2000b)手話通訳作業に関する心理言語学的研究—その 3 訳出パターンおよび通訳中に用いられている手話の特徴,日本手話学会第 26 回大会予稿集,28-31.
- 白澤麻弓・斎藤佐和(2000)手話通訳作業に関する心理言語学的分析—その2量的側面からみた手話通訳作業の特徴—,第 38 回特殊教育学会発表論文集,234.
- 米川明彦 (1984) 手話言語の記述的研究. 明治書院.
- 全日本聾啞連盟(1985)手話通訳制度調査検討報告書.全日本ろうあ連盟.
- 全日本聾啞連盟(1986)手話通訳認定基準等策定検討委員会中間報告.全日本ろうあ連盟.
- 全日本聾啞連盟(1988)手話通訳士(仮称)認定基準等に関する報告書.全日本ろうあ連盟.
- 全日本聾啞連盟 (1998) 手話通訳の理論と実際. 全日本聾啞連盟.
- 全日本聾啞連盟・日本手話通訳士協会・公正証書遺言問題弁護団 (1998) 民法 969 条改正をめざして—公正証書遺言と聴覚障害者—.

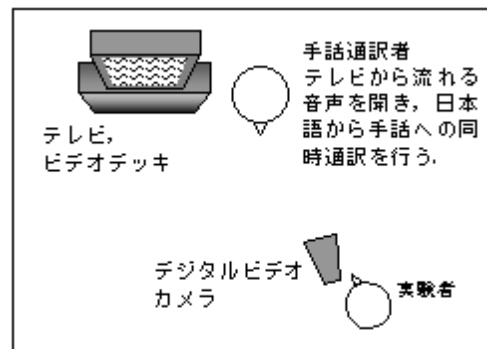


図1 データ収録場面

表1 手話の表記に用いた補助記号

記号	説明
/ /	手話単語を示す
/○○-----/	…の間、手話表現が持続している
CL:[]	類辞(手型が物そのものの代理をするとともに、そのものの分類を示すもの)p14 参照)を用いた表現
FS:[]	指文字で表されている表現
/L: / /R: /	両手を用いて表現されている部分で、Lは左手、Rは右手を示す
nod	うなずき
PT	指さし(後に続く数字は指さしが表示している人称を表し、PT1は1人称、PT2は2人称、PT3はの3人称を示す)
/○○・PT/	接語代名詞(文末に表れる代名詞で、文の主語を表示している。指さしと同様、人称を表す数字をとまう)
/1-○○-3/	方向動詞(数字は人称を示し、この場合、主語が1人称で目的語が3人称であることを示している)
/○○+H	同一単語のくり返し
()	言いよどみや言い直された表現
/_____強調/	単語に強調表示がかかっていることを示す
/ / / / / /	疑問文を表示する表情がかかっていることを示す(Whqは疑問視疑問文、YNqは肯否疑問文を表す)
/ /	視線の方向を示す
/ () /	()内に示した表情が付加されていることを示す
/#○○/	手話の形態素
○○・○○	要素が同時に結合していることを示す
○○+○○	要素の継時的な結合を示す

表2 日本語から手話への変換作業

省略	起点言語テキストに含まれる情報で、目標言語として訳出されていないもの
付加	起点言語テキストに含まれていない情報で、目標言語として訳出されているもの
言い換え	起点言語テキストに含まれる語で別の語に言い換えられているもの
原語借用	指文字や口形、漢字に対応した手話を用いて原語をそのまま表しているもの
同等	日本語に対応した手話単語などを用いてほぼ等価に訳出されているもの
圧縮・統合	起点言語テキストにおいて複数の語で表現されている部分を少ない語で訳出しているもの

表3 省略の分類

カテゴリー	説明
意図的省略	繰り返しやあまり重要でない語句で、通訳者の判断によって省略されたと考えられるもの
脱落	時間的遅れによって訳出できなかったもの
訳出不可	手話表現が思いつかなかったり、原文が聞き取れない、意味が把握できないなどで訳出できなかったもの

表4 繰り返し部分の省略の例

基本談話	訳出例
共通している共通項	共通項
センスオブユーモア、つまりユーモアのセンスがある	ユーモアのセンスがある…
知性のあられ、人間性の豊かさの現われだっということになって	人間性の豊かさの現れとということになって
センスをもっている、感覚を持っている	センスをもっている
大きなほうきがほしい、立派なほうきがほしい、竹のほうきがほしい	大きなほうきがほしい、竹のほうきがほしい

表5 省略された副詞の例

省略された語句
よく、いろんな、特に、さんざん、たった、ほとんど、やはり、つまり、大きさに言うと、そのときに、非常に、また、あるとき、もっと、大きな、丁度そのとき、わりと、それで、一生懸命、おっきな、うん、あの、そうとう、やっぱり

表6 言い換えの例

カテゴリー	説明	例
指示語の内容	指示語や曖昧な語 （「～こと」など） の内容を説明する もの	そんなことを→いろいろな会話を ～ことなんですね→～の表れです もの
合表対 の現応 言がす いなる いなる 換手 え場話	説明	語句を説明的に表 示するもの
	類似代用	同義語へ置き換え るもの
	変容適合	言い回しを変えて 表現するもの
		ハンサム→ <u>顔</u> /きれい/ ためらっている→ <u>答えられない</u> 重要→ <u>必要</u> ただ→ <u>しかし</u> ～に始まって→～と同じで 冗談をとばせる→ <u>冗談を言える</u>

表7 言い換える分類

上位	上位概念やより一般的な表現への言い換え、あるいは言い換えた結果意味の広がるもの	年ごろ→若い
下位	下位概念やより具体的な表現への言い換え、あるいは言い換えた結果意味が限定されるもの	言う→ <u>会話する</u>
同等	ほぼ同等の語に言い換えられており、特に概念的な変化が生じないと考えられるもの	重要→ <u>必要</u>

表8 言い換える成否の分類

適切	言い換えが適切であったり、言い換えた結果より明確に言い表されるもの	日本でもそうですが→日本でも <u>同じ</u> ですが
不適切	言い換えが不適切であったり、言い換えた結果、意味が変わったり、内容が限定されたりぼやけたりして十分に表されなくなるもの、	冗談がとばせる→ <u>冗談を言う</u>

	基元談話	言い換え後	日本語訳	備考
適切な言い換えの例	偏差値とか学歴ということではなく	/嬉しい/悪い/mod/卒業/経歴/関係ない/	頭のよしあしやどの学校を卒業したかといったことは関係なく	説明
	「あった」って言うんでそれを買うことにしました。	うれしい/買う/決める/	「あった」というので、それを買うことに決めました。	明確化 あいまいな語句の内容を明示
	ユーモアというのは、冗談が飛ばせるとかって言うのもありますが・・・	/FS:ユーモア/意味/何?/冗談だけ/違う/	冗談が飛ばせるなどということだけではなく	変容適合 言い回しを換えてより明確に
	みんなのその場を	/みんな/集まる/場/	みんなの集まった場を	明確化 指示語の内容をより明確に
	日本でもそうなんですけども、	/日本/同じ/	日本でも同じだと思いますが、	あいまいな語句を明確に
	～ということなんです。	/言う/意味/mod	～という意味なんです。	あいまいな語句を明確に

表9-1 適切な言い換えの例

	基元談話	言い換え後	日本語訳	備考
不適切な言い換えの例	偏差値とか学歴ということではなく	/頭がよい/mod/勉強/mod/違う/	頭が良いとか、勉強ではなく	説明の失敗
	「あった」って言うんでそれを買うことにしました。	/ある/PT3/ /PT3/買う/完了/	あったのでそれを買いました。	言い回しの一般化
	なんか理想の、こういう男性が良いとかああいうタイプが良いとか話をしますよね。	/複:[FS:リ+想像]/男[複数]/関連/会話/ /複:[FS:リ+想像]/男[複数]/誰?/似る/会話/ある/	理想の男性について話をする。 理想の男性は誰かというような話をする。	言い回しの一般化 言い回しの一般化
	ほとんど全員一致しているわけです。	/みんな/意見/同じ/	みんな同じ意見です。	言い回しの一般化
	私の友達で、年頃のお嬢さんたちは	/PT1/友達/若い/女[複数]/	私の友達の若い女性は	言い回しの一般化
	ユーモアのセンスがある男性であるということなんです。	/FS:[ユーモア]/FS:[センス]/ある/男[複数]/好き/	ユーモアのセンスのある男性が好き。	言い回しの一般化

表9-2 不適切な言い換えの例

カテゴリー	説明	例
省略された語の顕在化	原文では省略されている語を顕在化させ表示するもの	竹のほうき→竹で作ったほうき うちのは→うちのほうきは
文の整理・修正	接続詞や文末表現などを付加することによって、文を整理・修正するもの	しかし、つまり、例えば、だから
上位概念の提示	主に原語借用の前に用いられ、これから表す語の上位概念を示し、枠組み知識を提供するもの	デカプリオ→ <u>名前</u> /FS:デカプリオ/ 魔女の宅急便→ <u>映画</u> /魔女/宅急便/
説明の付加	主に原語借用の後に用いられ、原語で表示した後、語の内容についての説明を付加するもの	金物屋→ <u>金/物/店/鍋</u> <u>やかん/いろいろ/売</u> <u>る/店/</u> 渋い→ <u>渋い/年配/か</u> <u>っこいい/魅力/</u>

表10 付加の分類

表 11 原語借用の分類

カテゴリー	説明	例
原語表示	日本語として伝えたいもの、日本語を確認しておきたいもの（視線・口形などの強調をとまなう）	ユーモア、センス→指文字で表示 金物屋さん→漢字の借用
手話なし	固有名詞やカタカナ語、複合語など手話表現に対応していない語句に用いられるもの	デカプリオ、ロバートレットフォード→指文字で表示 人間性→漢字の借用
代用	手話表現が思いつかなかったために用いられるもの（いいよどみやためらいの表情をとまなう）	宅急便→持ってくるHIFS:[びん] 渋い、魔女→指文字で表示

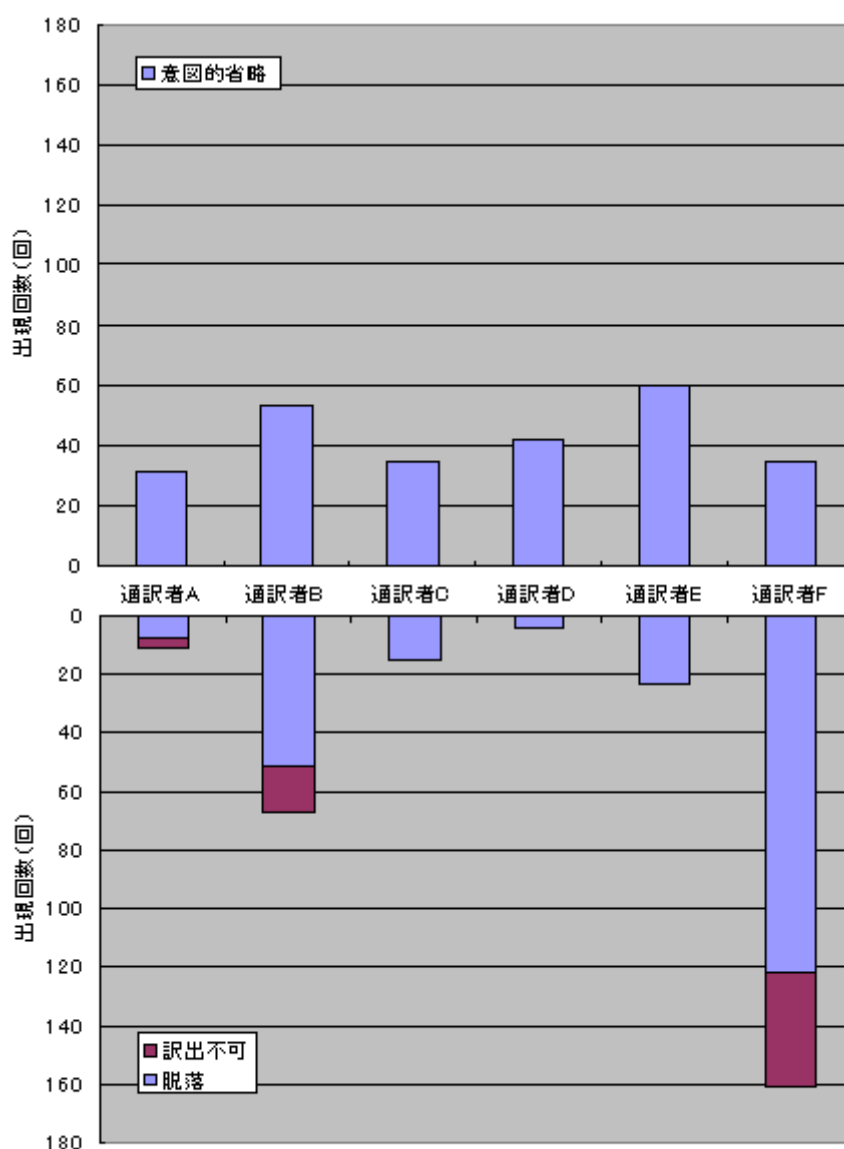


図2 通訳者が用いた省略の種類

原文	ベッタンコのほうきじゃなくて <u>もっと大きなほうき</u> が
訳文	/言う娘-1-----/
日本語訳	娘が私に
欲しい	立派なほうきが欲しい 竹のほうきが欲しいって言うんですね
	/CL:[ベッタンコ]/ほうき/ない/CL:[大きなほうき]-----/竹-----/
	ベッタンコのほうきじゃなくて、 大きなほうき、 竹の
	<u>いわゆる</u> 大きな竹ほうきのこと <u>だったんですね</u> 私は
	/CL:[大きなほうき]----/欲しい-----/言う娘-1/ /竹/FS:[ほうき]
	大きなほうきがほしいって言うんです。 竹ほうきのこと

図3 意図的省略を用いて訳出している例

ある人は <u>デカプリオ</u> が <u>いいわ</u> と <u>いって</u> みたり <u>いい</u> やロバートレットフォードだわと
/若い女[複数]-----/ /L:女-----
若い女の人たちは、
いってみたりいいややっぱりキアヌリーブスよと <u>いって</u> みたり <u>いい</u> やハンサム
-----/ / () /
FS:[デカプリオ]-----/良い-----/いろいろ-----/
デカプリオが良いとか、 本当にいろいろ…
じゃなくて <u>渋い</u> 感じの男 <u>って</u> いうのが <u>いい</u> と <u>いって</u> みたり <u>ジャガイモ</u> のような
/本当/ /FS:[渋い]-----/似る/男----/良い/
渋い感じの男の人が良いとか、
①<脱落> 「デカプリオ…」の部分の訳出に時間がかかってしまい、それに続く一節が脱落している。
②<訳出不可> 「ハンサムじゃなくて」の部分で、訳出を行おうと手が動いたが、手話表現に戸惑いが見られ、結局訳出できずに次の句に移っている。

図4 脱落・訳出不可の例

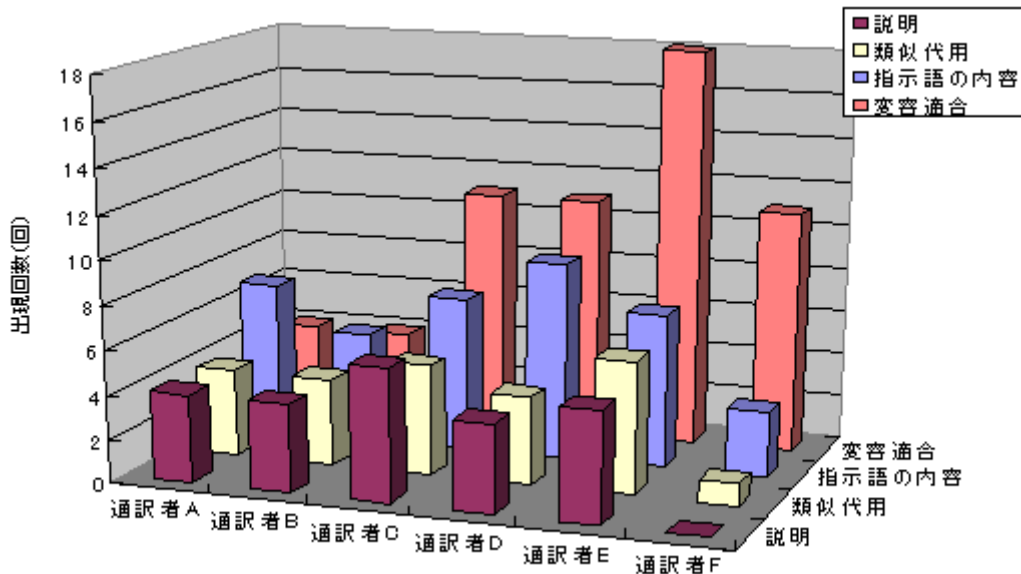


図5 通訳者が用いた言い換えの種類

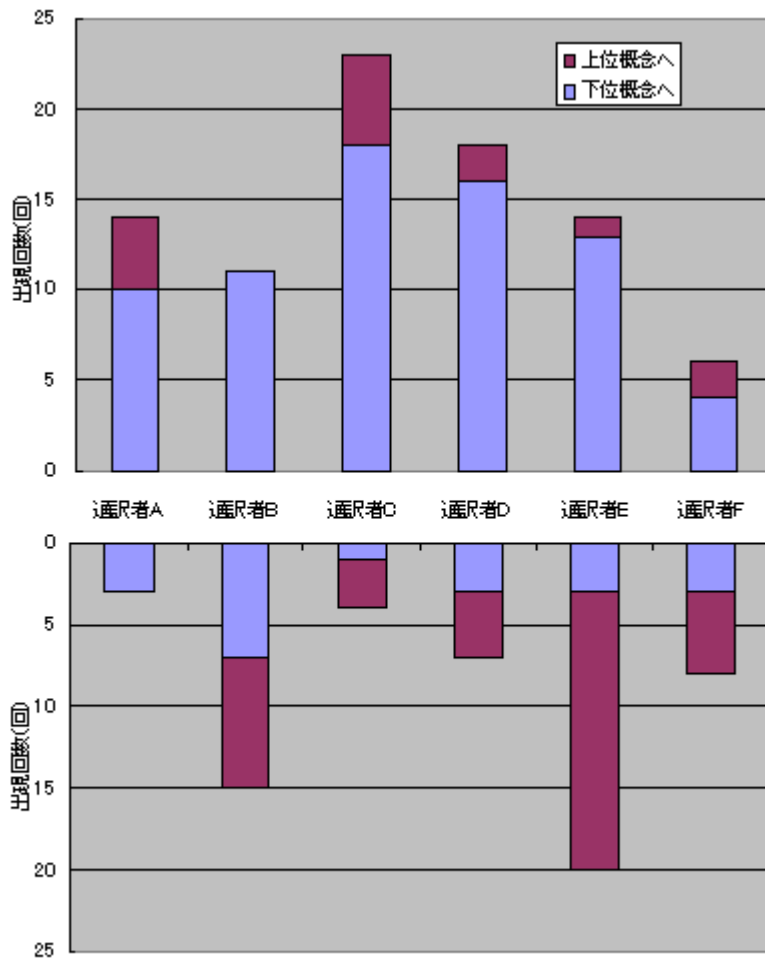


図6 通訳者の用いた言い換えの成否

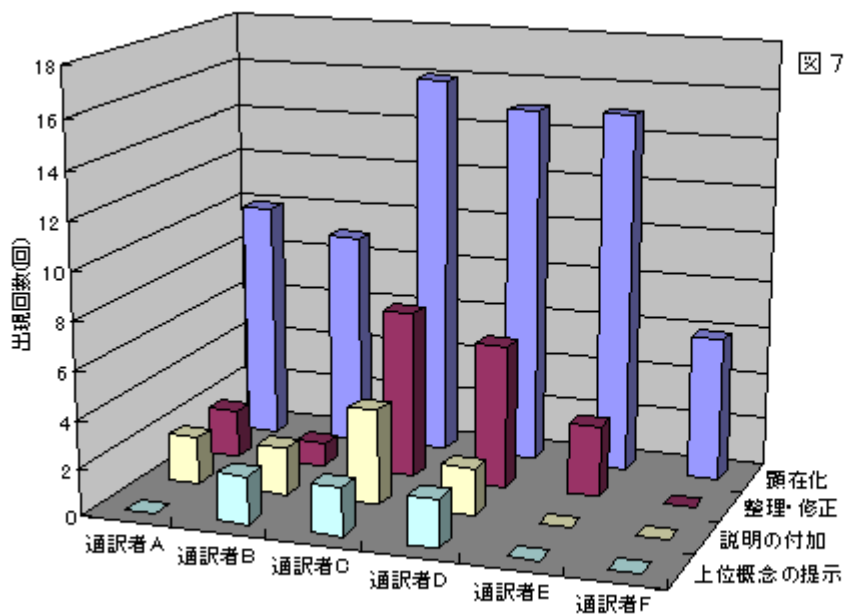
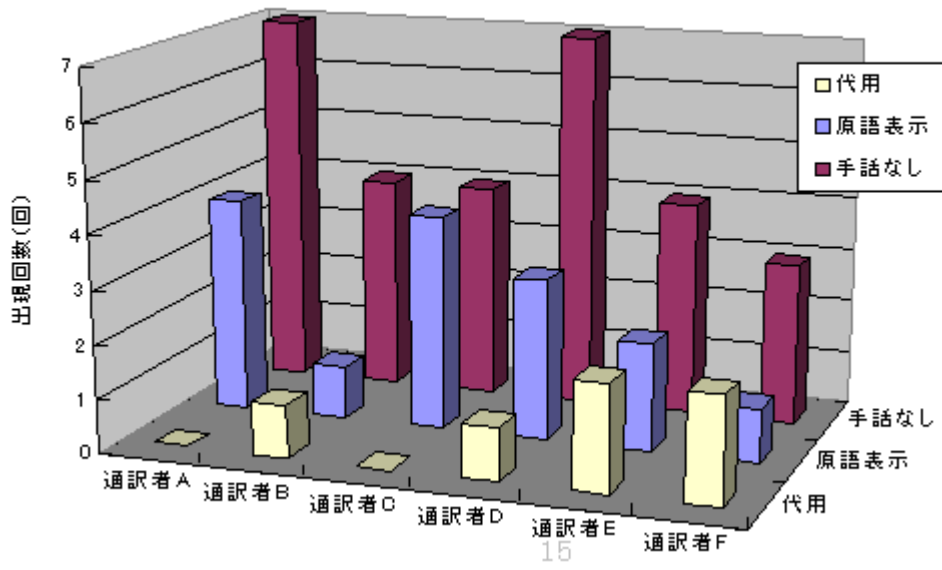


図7 通訳者が用いた付加の種類

図 8 通訳者が用いた原語借用の種類



巻末資料 1 省略タイプの訳出パターン

ある人はデカプリオがいいわと いってあたり ~~いやいやバートレットワードだわと~~
 ↓若い女[複数]..... / 女.....
 /R:PT 女#..... / /R:PT 女#.....

いってあたり いやいややっぱ キアヌ リーブス よと いってあたり ~~流れを~~
 つかむために聞いている ~~いや~~
 ハンサム.....
 /

FS:[デカプリオ]...../良い...../いろいろ...../

じゃなくて..... さげ 感じの男 って いうの がいい と いって あたり ~~ギャガイモのような~~
 /本当/..... ↓FS:[シブイ]...../似る/男...../良い/

人がいい なあ と いって あたり いろいろ なん です ね 自分 の こと は 欄 に あ げ て
 /会話++...../いろいろ...../ ↓PT1/()/

おいて さん さん い ろ い ろ 自分 の 好 み を 言 う わ け な ん で す け ど も
 /()/ /身:[おいておく]..... /PT1...../好き...../会話

——— :省略しながら訳出
 ○○○○ :脱落
 :訳出不可

通訳者 Fに見られたパターン

省略しながら訳出 ——— 脱 落 ——— 流れを聞く 省略しながら訳出
 ↓ ↓

巻末資料2 言い換えタイプの訳出パターン

ある人は ~~カブリアがいわと~~ ~~いってみたい~~ いやロバートレッドフォードだわど
 ……/会話……/多いある/過去/ /女……/FS:[ロバートレッドフォード]
 /L:PT 女++/

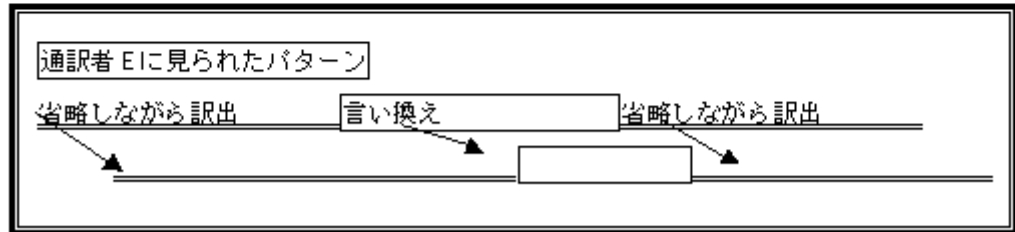
いってみたい 言い換え いやいややっぱりキアヌリーブスよ 省略しながら訳出 いやハンサム
 ……/良い……/ない……/

じゃなくて 渋い感じの男っていうの がいい と言ってみたい ~~シヤ~~ ~~ガイモのよう~~
 /誰/男……/別…/男……/良い/ /かっこいい/男……/良い/
 /L:PT 男/ /L:PT 男/ /L:PT 男/

人がいいな ~~あ~~ ~~と~~ ~~い~~ ~~っ~~ ~~た~~ ~~め~~ いろいろなんですね 自分のことは棚にあげて
 /FS:[シブイ]/男……/良い……/まぢまち……/
 /L:PT 男/

おいて さんざん いろいろ 自分の好みを言うわけなんですけども
 /自分……/問題……/身:[横におく]/PT1…/好き…/男[複数]……/

—————: 省略しながら訳出
 ○○○○: 脱落
 □□□□: 言い換え



巻末資料3 圧縮タイプの訳出パターン

基点談話と同等の手話表現 ロールシフトを用いることにより圧縮的に表示

ある人は デカプリオがいいわと **いってみたいり いや** ロバートレットフォード **だわと**

片手(上位概念の提示) (ロールシフト)

例えば(劇)FS[デカプリオ].....(男).....(身[そんなことない])

(R:男) (L:良い)

いってみたいり いやいややっばり キアヌリーブスよと **いってみたいり いや** ハンサム

(ロールシフト)

FS[ロバート].....(身[そんなことない])FS[キアヌ].....(良い) (会話++)

(L:良い)

じゃなくて 渋い感じの男っていうのがいい **とってみたいり** **ジャガイモのような**

(ロールシフト)

.....(顔[きれいな]男[違う[片手]渋い]PT3.....(年配[興味].....(違う[片手])

(L:良い) 渋いと原語のまま表示後、説明を付加

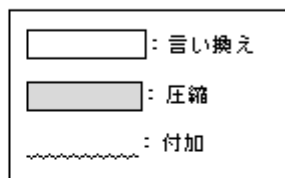
会話に継続目を付加することで圧縮的に表示

人がいいなあと **いったりいろいろなんですね** 自分のことは棚にあげて

説明的な言い換え

顔[1型]悪い[ダサイ] (体.....(身[たくましい])良い **会話+ある** (PT1顔)

(L:しかし+)



句レベルの圧縮

おいて **さんさん いろいろ** **自分の好みを言うわけなんですけども**

かたずける.....(男[複数].....(姿.....(会話+.....(同意))

(R:すき+)

